

二〇一六年四月二日

石磴の落花畳を踏みまどふ
やどかりの転がり落ちし潮溜り
新緑を踏んまへたちぬ丹の鳥居
身じろがぬ托鉢僧へ花吹雪
島バスの肩に触れもす懸り藤

二〇一六年四月二日

街路いま雨に浮き立つ花水木
春うらら施設より洩る演歌かな
うつの吾を氣遣ふメール菜種梅雨
藤房に頬傾けるモデルかな
寧かれと吹雪く桜や捕虜の墓
孕み鹿大和大路に迷ひをり

二〇一六年四月二〇日

叩かれて香りを放つ芽山椒
誰が置きし筍ならむ留守の土間
投げ入れしごと楼門や山若葉
鼻づらに花屑のせて散歩犬
路地おぼる昼を灯して辻地蔵
パン種のふくらむを待つ日永かな
潮騒に紛る祝詞や磯祭

二〇一六年四月一九日

鶏鳴の長く尾を引く春の昼
春落葉雪崩をなせるなぞへかな

ぼんこ

智恵子

菜々

せいじ

さつき

ひかり

なおこ

明日香

治男

ぼんこ

宏虎

よう子

花茗荷

なつき

ぼんこ

菜々

とろうち

よし女

とろうち

明日香

佇みて一句もがもな花の下

天を指し吾も吾もと松の芯

ひろげたる句帳に栞る落花かな

藤房に蛇の羽音の大合唱

二〇一六年四月一八日

喬木を登りつめたる懸り藤

春愁ふ明るきニュース欲しきかな

亀鳴くや否補聴器の電池切れ

末黒野も雀隠れとなりにけり

二〇一六年四月一七日

うらやかや相労りつ農夫婦

タンカーの影の歪みし沖朧

あたたかや震禍の安否問ふ電話

圏外となりし電話や山桜

弁当の蓋に落花とご飯粒

二〇一六年四月一六日

苔むせる巖に貼りつく落花かな

新緑の降り注ぐ道ペダル踏む

城址いまとめどなく降る桜薬

青き踏むこころもとなきベビー靴

靴底に残る昨日の花の屑

菜々

さつき

満天

三刀

さつき

明日香

菜々

三刀

花茗荷

智恵子

さつき

なつき

とろうち

泰山

智恵子

菜々

花茗荷

泰山

毎日句会みの選・二〇一六年四月二四日